日本医史学雑誌第三十四巻第四号
昭和六十三年十月三十日発行

医史学と私

―杉田玄白との「つきあい」―

杉　靖三郎（やすさぶろう）

私がはじめて「蘭学」に関心を持ったのは、中学の国語教科書で、菊池寛の小説『蘭学事始』を教わった時であった。鎖国の夜明け前に、和蘭の解剖学書の翻訳に苦闘、未知の学問分野と取り組み情熱を燃やしたことに深い感動をおぼえた。そのうち、玄白自身が書いた回想記―『蘭学事始』を原文で読んで、当時の日本医界の混迷と停滞、玄白らが医学革新の意気に燃えていたこと、外国の文物、ことに医学・医術については、本当のことはほとんど知られていなかったこと、さらに玄白らの努力（解体新書の訳述だけでなく）がいかに、わが医学の発展に貢献したかということなど、いろいろなことを知った。

私の学生時代（大正の終り頃）は、「南蛮・紅毛もの」のはやり初めであったので、何でもかじってみようという癖があった（それは、父が漢学者で、兄が古本好きだったので、その影響を受けた）ので、高校受験の講習会に通った神田の古本屋を冷やかしはじめた。そして、和綴本、古地図、泥絵など（その頃は安かった）買い漁った。新村出の『南蛮広記』、木下杢太郎の『厥後集』、芥川、菊池らのものなど、南蛮紅毛ものを愛読した。

高校大学時代は、マルキシズムの嵐が吹きはじめた頃だったが、私は、時流に逆らって、安土桃山から江戸時代の文物

に興味を惹かれ、とくに江戸時代の学術輸入の頃の「蘭学」（科学と医学）が関心の中心になった。

理科から医科へ進んだから、医学に関心を持たざるをえなかったので、医学の教科書のほかに、古代の科学、医学、医学医術の歴史の書物を買いそろえた。そして、現代の科学的医学なるものが、如何に架空の理論の固まりであるかを知ってその源流、とくにわが国における原点を探ってみたくなった。

たまたま藤浪剛一先生の著に「日本における実験科学は、小塚原の前野良沢・杉田玄白の腑分けの事業をもって新紀元としたい。而して、その翌日から着手した解剖書の翻訳をもって、真の科学記事の濫觴とし、真の科学の創立と見做すのである」（「本邦西洋医学の発達」『江戸時代の科学』）とあるのを見て、わが意を強くしたのだった。

私は、昭和四年春、東大医科を卒業して、とにかく実地に医療をしておこうと思って、東大の三内科を敬遠して、当時新設されたばかりの物療内科に入局した。ここでは、薬を使うばかりでなく、日光、電気、水治、温泉、マッサージなどの物理刺激も用い、先輩も多士済々で、針、灸、漢方薬など、当時オーソドクスでない医療法を特技として持っている人もいた。ことに直接指導を受けた荒井助教授は、フランス帰りの新進であったが、薬草（ハーブ）をよく用いられ、「フランスの臨床医学は、漢方だよ。その作用機序を知るために科学的医学があるのだよ」と言われた。最新のサッカリメーターを使わしていただき、アミラーゼの作用機序の研究をした。患者を診たり、実験したりして、教えられるところが多かったが、二年経ってから、伝染病院へ出向した。当時は急性伝染病（腸チフス・赤痢・疫痢など）が、夏季になると大流行したので、毎日のように何十人の生命が消えて行く。私は医師としての無力を痛感して、もっと実験研究したくなって、半年後に、生理学（生命の科学）の橋田邦彦教授の研究室へ入れていただいた。

当時は、臨床から基礎へ行くのは、いわゆる学位取りと見なされていた（今でもその傾向がある）。ところが橋田先生は、「生理学は〝生命の学〟である。それ故にこそ臨床にとっても重要であり、臨床は生理学を踏まえて真の医療であり

うる」といわれ、「西洋医学と東洋的な医術とが一つになったところに、真の新しい日本医学が樹立されるのである」とも言われた。

私が漢方医学のことを知りたいと申し上げたところ、さっそく、山田図南の『傷寒論集成』と中西深斉の『傷寒論名数解』を貸して下さった。(先生の父君は、漢方の大家・浅田宗伯の門人で、漢方家であったが、明治十七年一月の太政官布告「凡そ医師たらんと欲する者は、西洋医術の試験に合格せざれば、開業をすることを許さず」ということになって、郷里の倉吉で小学校の教員となった。)

私が、「ハリ・灸・あんま」に関心を深めたのは、橋田先生の御指導によるものだが、電気生理学(神経・筋・内臓の電気発生、電気刺激による反応を指標として、生命現象一般の機序を追究・把握するにある)によって、皮膚・内臓反射(ツボ)によるホルモン・神経の相関を見い出だすことをテーマとした。(H・セリエの「ストレス学説」と同様の立場にたつものである。)

橋田邦彦先生は、生理学界の第一人者であったが、漢学・仏教にも造詣深く、「大蔵経に埋って科学をにらむ碩学」であった。先生は週に一回二時間、研究員らと夕食をともにしたあと、偉い学人—科学者、東西の哲人、思想・宗教家、医人など—の為人と業績について紹介された。それを弟子たちがメモや筆記したものが、『碧譚集』『空月集』などの名著(岩波書店刊)になり、また、『正法眼蔵釈意』の四巻(山喜房刊)、『正法眼蔵側面観』(大法輪閣刊)などになったのである。

門下からは多くの俊秀を輩出している。私もおかげで、多少の生理学研究での寄与ができたが、それよりも、実験を行ずることによって、自然即人生即世界の広い立場・見方を与えられたことは、何物にも代えがたい賜物であった。

橋田先生は、「研究者は科学の行者(ぎょうじゃ)である。研究室は科学者の道場(どうじょう)である」と言っておられたが、橋田道場の先輩・同

僚から、科学・医学・医術・医療を通して、医の道へ導かれた。とくに大きな影響をうけたのは、内山孝一博士であった。私が生理学に移った頃には、内山氏は慈恵医大卒・慈恵医大生理の助教授で、『生物哲学の研究』を著わし、「H・ドリーシュの全体性」を紹介して、生理学会でも知られており、医史学の造詣も深かったが、昭和八年の春、一研究生として、橋田教授の教室に移って来られた。

内山さんの部屋に時々うかがって話をしていたところ、橋田先生が見えて、私も仲間に入れてくれ、といわれて、週に二～三回、学問のよもやま話をして下さった。そのうち、内山さんを中心に、研究室外の同好の士も集まって、月一回「医学史の集い」がもたれた（この集いは、橋田先生から「汲泉社」と命名していただいた）。

この汲泉社には、医学会ではユニークな人が多かった。医の先達、故事来歴、古文書、蘭学関係のものなどを語り合う、肩のこらない、愉快な会合であった。私にとっては、実験の合間のこよなきレクリエーションであった。（この頃のことは、『日本医事新報』（昭和九～十二年）に連載されている。社長の梅沢彦太郎氏、同社の村上秀氏も汲泉社同人だった。）

この会でショッキングなことが起こった。それは、同人の原田謙太郎博士（入沢内科出身の先輩）が虫食い古写本の大きな束を披露して、その表紙には『鶚斎日録』とあったからだ。鶚斎とは杉田玄白の号、杉田家に伝わっている杉田玄白の自筆の日記である。同席の人たちは驚いた。私も心の震えるのを禁じえなかった。

虫食いがひどかったので、紙もめくれない。原田さんの胆入りで、これに裏打ちしてもらい、どうにか本の形になった。ところが、虫食いによる欠損、それに玄白一流の達筆の草書、なかなか読みは下らない。何人かで手わけして、書写することになった。よく読めるところもあったが、わかりにくいところは、私の父（渡辺盤山、漢学者、書家）が七十二歳で楽隠居していたので、一年がかりで、大半を書写してくれた。まだわからないところがあるが、またそのうちに、といっていた父は翌年（昭和十三年秋）亡くなった。

この日録には、天明から文化に至る十数年間（玄白五十五歳から七十三歳まで）、毎日のことが、一日も欠かさず、日々

の天候、起居のこと、往診先き、散文、漢詩、和歌、狂歌、俳句、川柳から、当時の世間の雑事、うわさまで、丹念に書きこまれている。

これは、世人一般にも知らすべき貴重な資料だということで、当時「朝日新聞」の記者であった渡辺紳一郎（私の実兄、東大・支邦文卒。後に、ＮＨＫの「話の泉」「私の秘密」のレギュラー）に話して、大きく取り上げて公表してもらった。ついで原田氏も『中央公論』に執筆して掲載した（大正十一年八月号）。

当時、玄白の医学上の業績や思想を伝えるものは、出版物（木版和綴本）としては、『蘭学事始』『形影夜話』『和蘭医事問答』『野叟独語』などがあったが、容易に手にすることはできず、方々の図書館で探してやっと見ることができたのだった。

この門外不出の秘録『鶚斎日録』は、玄白の没後百二十年にして世に現われたのである。これは、明治初年の頃、『蘭学事始』の写本が神田孝平によって湯島の夜店で発見され、福沢諭吉によって世に紹介されたのと同様に、まったく偶然の出来事であった。諭吉が「今は亡き人と思ひし朋友の再会に遭ふたるが如し」と感激して、戦禍の下（維新戦争・戊辰の役）、無くなっては大変だと思って、苦労して出版に漕ぎつけ、それから二十年もたった明治二十三年に再版して世に広めることができ、玄白の偉業が今日に伝えられたのである。

私も、この日録を出版して世に伝えようと思ったが、大戦前のこととて紙も統制になり、印刷所も縮小されて、どうにもならなかった。そうこうしているうちに、昭和十五年、時艱をになって橋田先生は文部大臣になられ、内山氏は秘書官として大学から出て行かれた。ついで私も、文部省の研究官（国民精神文化研究所員）に任ぜられ、科学・医学部門を担当することになった。その翌年（昭和十六年十二月八日）、ついに戦争に突入、やがて東京も空襲の爆弾にさらされることになった。

蘭学関係の資料は、下谷・根岸の大槻家に『大槻文庫』として、大部分が蒐められていたが、それも危険になっていたのを橋田先生（文相）のおはからいによって、これを多摩川の「静嘉堂」（岩崎家がスポンサー）に移した。この『大槻文庫』は整理されて静嘉堂に現存している。（また、儒医研究家・安西安周氏が蒐めた明治以降の医書・医史ものは、国民精神文化研究所に移しておいた。戦火は免かれたが、敗戦後、同研究所は解体されて、国立教育研究所になり、私もGHQの追放を受けたので、その後どうなったかわからない。）

私の国民精神文化研究所での仕事は、わが国の学術（主として医学・医学史）、東西の学術・文化交流、日本の科学技術のあり方などを研究することで、資料を蒐めて年代別に整理したり、古今東西の主要な科学者や医学者の伝記を読み返して訂正することであった。それらのうちで、私が主としてやったのは、貝原益軒と杉田玄白の業績と為人（ひととなり）、その時代の流れ、学問文化の発展の追究であった。

私は、菊池寛の小説『蘭学事始』のことを思い出した。この小説では「玄白は初めから虫が好かず、訳学の進行とともに、和蘭語では前野良沢に歯が立たず、ますます劣等感を強く抱くようになった」と想定して、「玄白の反感と意地によるライバル意識が、あの偉業の原動力であった」としている。玄白とは、どんな医者だったのか、またその為人はどうであったのか、ということを知りたかった私には、もの足りなかった。

『鵠斎日録』やその後集めた玄白の書いたものや弟子に与えた書翰、人づきあい、随想や詩歌などを読み合せてみると、杉田玄白の全貌はまだほとんど捉えられていないことを知った。そして、何といっても、重要なものは、この日録であると痛感した。だが、空襲はますます激しくなり、国運も危ぶまれるようになったので、とりあえず玄白先生のものだけでもまとめて出版することにした。（福沢諭吉が『蘭学事始』を出版した苦心が思いやられる。）

『杉田玄白全集』（全三巻）として、玄白の原文を主として編集して、当時もっとも盛んに出版していた「生活社」に託した。しかし、昭和十九年十一月、その第一巻『鵠斎日録』が刊行された直後、大空襲によって生活社は灰燼に帰し、こ

の第一巻だけの百部ばかりを残して、渡してあった原稿もすべて消失してしまった。（その半年後には、私の家も焼夷弾で烏有に帰した。）

やがて敗戦、GHQ追放を受けて七年間、家族七人生きて行くのがせい一杯だったが、次第にそのショックから立ちなおり、玄白全集のことを思いかえし、玄白のものを借りては書写しはじめた。そして、『杉田玄白・覚え書き』と題して、雑誌『社会保険』に連載（昭和四十三～四十七年）させてもらった。それらをまとめて『夜明けの人・杉田玄白』（徳間書店、昭和五十一年）、それに、資料の原文を加えて、『和蘭医学事始』（春秋社、昭和五十八年）として出版した。

『鶴斎日録』は焼け残って、部数は少ないが、杉田玄白ものには屢々引用されているので、いわば不幸中の幸であったが、もっと多くの人々に知ってもらいたく、先般多少補筆して『杉田玄白日記』（青史社、昭和五十六年）と題して新しく出版しておいた。私は、玄白の為人、医人としてのあり方、そのものごとの見方―考え方は、その日録、随想、詩文の中に躍如としているので、もうそろそろ学者先生方の認識も正しくなってもよいのではないかと思うのだが、どうも菊池寛流のとらえ方は改められていないのではあるまいか。

『解体新書』の扉には、翻訳者は杉田玄白となっており、いちばん中心であった前野良沢の名が記されていない。序にも版にも良沢のことは見い出せない。これが後世の誤解を生じるもとになったらしい。たとえば、「玄白は良沢に劣等感をいだき、それをいつも根に持っていた」とか、「玄白は自己顕示欲が強く、名声好きであった」とか、あるいは、「どっちかというと、学究肌ではなく、世間的な常識人であり、いい意味のボス的資質の持ち主といえよう」とか、「日録にも、「良沢死す」とだけ書かれている」とか、専門の歴史家たちも書いている。

また、杉田玄白は歴史上の人物として知られており、今さらながらというかもしれない。しかし歴史上の人物伝といったものや解説書というものは、ともすれば善・悪を強調したフィクションがつきまとい、その人物が大きければ大きいだ

け、憶測も広がって行くものである。そして、歴史上の人物は、後世の人びとの頭の中でひとり歩きしていって、とんでもない歪みを受けることにもなる。人物や出来事は、重要であればあるほど、原著や事蹟について丹念に見直し、虚心にとらえなければなるまい。

今や、日本にとって大きな反省のときが到来している。明治維新以来の欧化思悪、さらに戦後の米国一辺倒の行き方が壁につきあたって、あらためて見直され、その価値が問いなおされ、これからの日本の進路は選択を迫られているのだ。この意味において、玄白とその生きた江戸時代の末期こそは、今日の私たちの学ぶべきところが大きいのではあるまいか。江戸末期から明治初期に来日した西欧の医人についても、あらためて見直されなければならない。（シーボルトやベルツらについても、過ぎ去ったこととしてではなく、その事蹟や忠言を、これからの日本の発展の糧にすべきであろう。）

『解体新書』の翻訳出版ということが、西欧の科学知識や文化を取り入れる一つの暁鐘であったことは、一般に異論のないところであるが、科学史家の多くは、それまでは日本には「物心一体」としての物があるだけで、客観的な「物」はなかった、西洋の学術文化が入ってきて「物」というものを発見し、科学が誕生するようになったという。また、日本には、物事の筋道をたどる「理論」はなかった。すなわち、「物と心」「自然と人」とがこんがらかっていて、理解はおろそかにされていたので、自然科学も科学的医学も発達しなかったという人もある。

『蘭学事始』を心して読めば、玄白らが、ただ「理解」を求めるためにやったのでなく、西洋の優れたものをとり入れて、自分の携わる医学・医術をよりよく遂行せんがための、つまり「職域奉公」（新しい言葉ではプロフェッショナル・エシックス）のためであったことは、すぐわかるであろう。医学・医術は、医人の実践と「一つ」にならなければ、空論に過ぎなくなる。人間の生命は、精神と身体とが別々に存在するのではなく、「心と体」「自然と人」とが一体になって実在しているのである。

あの蘭医学移入の苦難の業をやり遂げたのは、ただ物好きだとか、名誉欲のためだとか、あるいは金もうけのためだとか、執念ぶかいとかいって傍観するのでは、玄白らの仕事の意義も、西欧の学術の真の価値も見い出すことはできず、それ以後わが国で発展した学術文化を正しく捉えることはできないであろう。

このことが、今日においても、わが科学技術が欧米の真似事であり、盗用している、といわれる所以であるとも思われる。

寺田寅彦博士（一八七八～一九三五、東大教授、独創的な物理学者であり、エッセイの名人）は、「科学を大衆のものにするには、エッセイ（随想、随筆）がもっとも相応しい。論文とちがって、具体的で血が通っているからである」という意味のことを、いろいろな随筆に書いておられる。（「天災は忘れた頃にやってくる」の名言でも知られている。）すぐれた科学者は、すぐれたエッセイスト（英語では、随想的評論家の意味に用いられる）である。電気生理学の開祖であるE・デュボア・レイモンも、名エッセイストであり、歴史家としても、哲学者としても有名である。

古代ギリシアのイオニア時代には、「学問は人とともにあり、学者（フィジオロゴイ）の考えることが、そのまま学問（フィジオロギア、生理学の語源）であった。つまり、学問とはもともと随想的なものであって、人を離れて学問というものはなかった。アリストテレスの学問は、散歩しながらの会話の中から生まれたので「逍遙学派」と呼ばれる。

玄白の真骨頂も、その独特な随想文にあり、その「流麗な語り口」は、心して読めば誰にもよくわかるのである。とくにその医学的な随筆（『和蘭医事問答』、『狂医の言』、『乱心二十四ヶ条』、『養生七不可』、『野叟独語』、『形影夜話』、『玉味噌』、『耄耋（もうてつ）独語』など）は、是非ともじっくり味読すべきである。直接玄白先生に語りかけられる思いにかられるであろう。「人と学とに出合う」とはこのことを言うのだと思う。

これら玄白の医学的随筆を集めて一本にし（原文をそのままに、読みやすくし、解説をつけ）て出版した（春秋社）。同様の主旨から、『養生訓』（貝原益軒著、杉靖三郎解説、徳間書店刊）を出しておいた。

私は、いろんなことに「手を出して」きたが、ふりかえってみると、杉田玄白との「つき合い」は、いちばん長く、深いのである。だから「医史学と私」という題で書くとなると、どうしても玄白に濫觴する「蘭学」のことになってしまう。当時の西洋医学については、「西欧における日本研究」の古書（稀覯本）―『シーボルトの日本』『ケンペルの日本史』、ツンベルクの初版、ルイス・フロイス、グワルチェリなど―も所蔵しており、『日本科学の伝統』（目黒書店）にまとめられている。

今日、科学技術の時代、医学医術の進歩に目くるめくばかりである。だが、ともすれば医学医術の中心に「病める人」のいることを忘れがちになる。「病人の苦痛を除き、病気をなおす」という医学本来の目標を見失ってはならない。このためには、医の学と術の正しい進め方をしなければならない。「温故は知新なり」（王陽明流の読み方）といい、故きをたずねるのは、新しい行き方を知ることであり、医学医術の正しい将来へ進むためには、故くから行われてきた「医の歴史」を正しく把握することである。この意味においても、医学史・医史学のもつ意義は重大である。

わが日本医史学会の一層の発展を祈って筆をおく次第です。

（昭和六十三年一月十八日記）

（東京教育大学名誉教授
日本医史学会名誉会員）